

接触場面と母語場面

— 体験談の終結部から見たその特徴 —

佐々木 泰子

要 旨

本研究では、体験談の終結部の発話連鎖に焦点をあて、接触場面の特徴を日本語母語場面との比較を通して明らかにすることを試みた。その結果、体験談の終結部の発話連鎖は、「連鎖型」、「非連鎖型」、「ゼロ型」の三つのパターンに類別された。さらに「連鎖型」は、評価先導と相づち先導に、「非連鎖型」は、評価発話のみと相づちのみにそれぞれ下位分類された。次に、それぞれのパターンの出現率からみると、母語場面では、話し手と聞き手が評価を積極的に言語化するため終結部の発話連鎖が長くなり、互いの共感が生まれ会話が盛り上がりとともに体験談の終結の予測が容易になる。一方、接触場面では非連鎖型とゼロ型、すなわち終結部が1発話のみまたは終結部のない場合が5割を超え、体験談の終結が唐突であり、共感構築よりも会話を滞らせずに進めることが重視される傾向が見られた。

【キーワード】接触場面、母語場面、体験談、終結部、評価、発話連鎖

1. はじめに

日本語学習者が日本語を話すのはほとんどの場合接触場面であることを考えると、接触場面の様相を明らかにし、その成果を日本語教育に生かしていくことが重要である。母語話者と非母語話者による接触場面の会話における言語行動の研究には、フォーナートーク、意味交渉、コミュニケーションストラテジー、言語管理など様々な観点からの研究が見られる。しかし、これらの研究は、母語話者あるいは非母語話者のいずれか一方に焦点をあてたものがほとんどである。また日常的な言語行動や実際の発話、さらには発話の連鎖に注目した研究は少ない。そこで本研究では、接触場面の母語話者及び非母語話者の会話への参加の様相を、両者によって相互行為的に達成される発話連鎖から明らかにすることを目的とする。そのために日々の言語活動の中でしばしば見られる、自分の経験や過去に起こった出来事について語る体験談、中でも体験談の終結部の組織化に着目し、分析を試みる。

私たちは、日々の言語活動の中でしばしば自分の体験や過去に起こった出来事を語り合う。定延(2008)は、私たちは体験を語りたがる存在であると述べている¹。山口(2008)では、体験談は単なる出来事の報告ではなく、語り伝えた出来事を聞き手が疑似体験し、語り手がその出来事に対して下す評価を聞き手が共有することが重要であり、体験談を語る

目的は世界観の共有や共感の構築であるとしている。西口(2008)は、学習者にとって日常の何気ないおしゃべりの中で自分の経験を語ることは、言語習得のみならず人間関係の構築に重要な役割を果たすと述べている。

このように日常的で、かつ人間関係に重要な役割を果たす体験談であるが、体験談の語り手は長いターンを占有しつつ聞き手の興味をつなぎながら話をしなければならない。一方、聞き手も共感的に相手の話を聞くことが求められる。そのために、非母語話者にとっては高度な言語能力及び相互行為能力が必要とされる言語活動である²と見えよう。なお、本研究で体験談の中でも終結部に着目するのは、終結部の評価やコメントには、話し手と聞き手の共通理解を可視化しつつ、話題への強い参加を示したり、話題の終了を予告したりする働きがあるとされており(Goodwin & Goodwin 1992)、相互行為としての体験談を考えるうえで、重要な役割を果たしていると考えられるからである。

2. 先行研究

体験の語りについてはこれまで体験談、物語、ナラティブなどとして多くの研究がある。しかし、それらは語り手や語られた話そのものに焦点が当てられたものがほとんどで(Labov 1972, Chafe 1980, Hymes 1996 など)、体験談は語り手と聞き手によっ

て相互行為的に達せいされるものである、という視点からの研究はあまり見られない。

以下では、本稿の分析の視点と関係の深い相互行為的視点から体験談の分析を行った研究及び体験談の構造について述べた研究を取り上げる。

2.1 体験談の相互行為性に着目した研究

体験談を、話し手と聞き手によって相互行為的に構築されるものという立場から分析した研究のうち、Ochs 他(1992)は、体験を語るという行為が日常の会話の中でどのような活動として位置づけられるのか、という点に注目している。そして、家庭内の体験談を理論構築活動と位置づけ、子供たちは学校で習得されると言われている理論的思考を、家庭での体験談の協働構築過程を通して習得すると指摘している。

西川(2005)では、Ochs 他(1992)にならい、女子大生の体験談を分析し、体験談の参加者は語られている経験を、共同作業で納得のいくストーリー(理論)に作り上げており、このことから、日本語母語話者友人間で話される体験談にも家庭内の体験談と同様に理論構築活動的側面があるとことを明らかにした。同じく女子大生の体験談を分析した佐々木(2006)では、Tannen(1989)及び中田(1992)のくり返しの機能の枠組みをもとに、会話の参加者の共感や一体感の構築のプロセスを示している。

2.2 体験談の構造について

体験談の構造については、モノログ的体験談を対象とした Labov(1972)、Chafe(1980)、Hymes(1996) などや会話の中に現れる体験談を対象とした Sacks(1974)、串田(2006)などがある。

社会言語学の分野における先駆的研究である Labov(1972)は、「体験談は、実際に起こった(と想定される)出来事に口頭の節の連鎖を対応させることによって、過去の出来事を再現する一つの方法である」(pp.359-360)と体験談を定義し、アフリカ系アメリカ人の話す体験談の表現や構造の特徴を明らかにしている。Labov(1972)では、体験談は、「1. 要約 2. 方向づけ 3. 展開部 4. 評価 5. 結果 6. 終結部」の六つの要素からなる」(p.363)とされる。

一方、会話の中に現れる物語を対象とした Sacks(1974)は、「体験談は、「発端」、「中心の語り」、「反応」の三つの段階から構成される」(p.33)と述べている。

また、串田(2006)によれば、体験談は、まず、体

験を語ることの提案とその受け入れまたは拒否を含む「前置き連鎖」、次は、語り手の複数の構成単位を用いた出来事の報告と、聞き手の先に進むうながしや理解のチェックである「語りの連鎖」、そして最後は、聞き手による出来事の評価やコメントと語り手による承認と拒否を含む「受容の連鎖」で構成される。

本研究の終結部は、Labov(1972)の評価・結果・終結部に、Sacks(1974)の「反応」に、そして串田(2006)の「受容の連鎖」にほぼ対応する。それぞれの構造の対応関係を表1に示す。

表1 体験談の構造

	要約・ 方向づけ	展開部	評価・結果・ 終結部
Labov			
Sacks	発端	中心の語り	反応
串田	前置き連鎖	語りの連鎖	受容の連鎖
本研究			終結部

3. 研究課題

本研究では、体験談の終結部に着目し、体験談は相互行為的に組織化されるという視点から、母語場面と接触場面の終結部の比較を通して、接触場面の特徴を明らかにすることを試みる。そのために以下のような研究課題を設けた。

課題 1. 体験談の終結部にはどのような発話の組織化のパターンが見られるか

課題 2. 接触場面と母語場面でそれぞれのパターンの出現率はどのようにになっているか

4. 研究方法

4.1 データ

体験談のやり取りは、話題や親疎関係に影響されることが考えられる。そのため本研究では、話題、性別、親疎関係などを考慮したデータを収集することとした。詳細は以下の通りである。

対象は、日本語母語場面及び接触場面の友人同士的女子大生二者間の会話に見られる体験談の終結部である。体験談の内容は、「楽しかったこと」や「面白かったことに」についてである。体験談の数は、母語場面は10組20名から得られた58の体験談、それに対して接触場面は15組30名から得られた63の体験談である。データ収集は2006年7月から9月にかけて行った。母語場面は日本(東京)の大

学で、接触場面は中国(大連)の大学で収集した。学習者は中国語を母語とし、日本語を専門とする4年生である。日本語のレベルを上級の学習者³としたのは会話の中である程度の長さのまとまった話ができる日本語力を有するレベルと考えたからである。これらの会話を録音・録画し、文字化した⁴。

4.2 分析の方法

まず、それぞれの場面の会話の中から Labov(1972)による体験談の定義である「過去の出来事や経験が時間順に配列され、少なくとも二つの物語り節から構成される」(p.360)に従って体験談を抽出し、次に終結部の認定を行った。

Strauss & Kawanishi (1996)は、終結部を構成する受容・評価発話として感情を示す表現、同意を示す表現、強調やオノマトペ、繰り返しや共話などを挙げている。本研究では、終結部を、展開部の連鎖が終わり、Strauss & Kawanishi(1996)で終結部を構成するとしている表現が最初に現れた発話から体験談の最終発話までとした。

体験談の抽出及び終結部の認定は、筆者と協力者1名が、まず、すべての体験談についてそれぞれ個別に行い、次に、両者の異なる認定箇所について協議の上決定した。

5. 結果

5.1 体験談の終結部の組織化のパターン

体験談の終結部の組織化のパターンは、表2に示す通りである。まず終結部があるものとなないもの(ゼロ型)に類別された。次に、終結部のあるものは発話が2回以上続くもの(連鎖型)と一発話のみもの(非連鎖型)に類別される。連鎖型はさらに評価表現が最初に来るもの(「1a 連鎖型(評価先導)」)と相づちが最初に来るもの(「1b 連鎖型(相づち先導)」)に類別される。また非連鎖型は終結部が1発話のみで評価表現を含むもの「2a 非連鎖型(評価)」と相づちのみもの「2b 非連鎖型(相づち)」に類別される。

表2 終結部のパターン

パターン	下位分類	
1. 連鎖型	a) 評価先導	b) 相づち先導
2. 非連鎖型	a) 評価	b) 相づち
3. ゼロ型		

以下、それぞれのパターンの特徴を本研究のデー

タからの例を参照しながら挙げていく。会話例中の四角で囲まれた部分は終結部を示す。

会話例1は、「1a 連鎖型(評価先導)」の例である。父親が酔って電話をしてきた時の様子を母親がメールで知らせてきたことが話題になっている。

会話例1 「1a 連鎖型(評価先導)」

父から電話が来た話(友子→優子: 母語場面)

- 1 友子 そしたらなんかお母さんから:あとでなんかメール来て:お父さん酔っ払って電話してたよ:[とかいって
- 2 優子 [あ:あ:あ
- 3 友子 なんか、うれしかった
- 4 優子 あ:あ:え:いいね、確かに(.)酔っ払って、すぐなんか娘にかけるっていう、[なんかいいよね:
- 5 友子 [そうそう
- 6 優子 なんか娘なんだみたいいな=
- 7 友子 =そうそうそう[うれしかった
- 8 優子 [確かに(.)へえ:

友子の「なんか、うれしかった」(3)とその時の感想を述べる発話が、終結部の開始発話である。それに対して優子が、「あ:あ:え:いいね」(4)で始まる発話で応じており、その後優子の「確かに(.)へえ:」(8)という発話で体験談が終了するまで「うれしかった」「いいね」などの評価発話や「そうそうそう」などの相づちの繰り返しや、同時発話、間を置かない発話などの発話連鎖が続く。

会話例2は、「1b 連鎖型(相づち先導)」の例である。万里の長城に行った時のことが話題になっている。評価表現は含まれず山田の「へえ」(6)、黄の「うん。はい」(7)の相づちの連鎖でこの体験談は終了している。

会話例2 「1b 連鎖型(相づち先導)」

万里の長城に登った話(黄→山田: 接触場面)

- 1 山田 へっ ていうことは[、:、両親が
- 2 黄 [ん
- 3 黄 うんうんうんうん、両親が
- 4 山田 おんぶして、だっこして?
- 5 黄 そそそそそう
- 6 山田 へえ。
- 7 黄 うん。はい

会話例3は「2a 非連鎖型(評価)」の例である。京子が幸子に高校時代に入っていた放送部の話をして

いる。

会話例3 「2a 非連鎖型(評価)」

放送部の話(京子→幸子：母語場面)

- 1 京子 あ、その楽しかった話も[それし
ようと思ってたんですけど:]
- 2 幸子 [うんうん
んうん、うんうんうん]
- 3 京子 あの：放送：、の、部活に入ってた
んですよ
- 4 幸子 あ、そうなんだ。[あるよね:]
- 5 京子 [たち、たちあげ
だったんですよ、私たちの代]
- 6 幸子 うん
- 7 京子 だから、あん幸子、そういうことを
学べなかったんですけど:]
- 8 幸子 うんうんうん
- 9 京子 ラジオドラマとか?
- 10 幸子 あ：はいはい[はいはいはい]

- 11 京子 [作るときに、すごい
音響のあれとか楽しいな：と]
- 12 幸子 え、ラジオドラマとかって脚本どう
するんの?

京子が「楽しいな：と」(11)と言った後、幸子はすぐに発話(12)で認識の変化を示す「え」を伴ってラジオドラマの脚本のことに話題を変える発話をしており、終結部は1発話のみで発話の連鎖は見られない。

会話例4は「2b 非連鎖型(相づち)」の例である。呉が茶道の授業を取った時、つらかったけれど1時間半頑張って正座を続けた体験を佐藤に話している。終結部は佐藤の「ええ」(11)という相づち1発話のみで終わっている。この会話例4や先に挙げた会話例2のように接触場面の終結部は短い連鎖で組織化される。

会話例4 「2b 非連鎖型(相づち)」

茶道の授業の話(呉→佐藤：接触場面)

- 1 呉 みんな、そうでは：ありませんでした。でも、私はずっと我慢して、hhh
- 2 佐藤 はい
続けて、ええと、一学期も、茶道の
- 3 呉 授業
- 4 佐藤 ええ
- 5 呉 そう
- 6 佐藤 ええ
- 7 呉 受けました
- 8 呉 ああ、でも、[先生も感動されました。うん]
- 9 佐藤 [あ、
[え

10 呉 私はよく褒められたんです

→11 佐藤 ええ

会話例5は体験談の終結部が見られない「ゼロ型」の例である。王は鈴木に発話(4)まで自分の夏休みの話をした後、評価発話なしで発話(5)から東京の夏についての話題に話を変えている。

会話例5 「3 ゼロ型」

夏休みの話(王→鈴木：接触場面)

- 1 王 うん、もともとは、夏休みのどこかへ
旅行に行きたいけど、結局、一日中も
あのう、へ：、[なんか家において]
- 2 鈴木 [家↑]
- 3 王 ネットしたり、ネットしたり、本を読
んだり、寝たりとか
- 4 鈴木 うんうん、寝たり↑hhh
- 5 王 東京のほう↑

以上五つのパターンの会話例を見てきたが、連鎖型からは評価や感想の発話を互いに述べ合う発話連鎖によって会話参加者の共感が構築されていく様子が観察される。その一方で、連鎖のないものや終結部のないものからは、話題が急に変わってしまったような唐突さを感じられる。

5.2 終結部の連鎖のパターンの出現状況

それぞれの場面の終結部の連鎖のパターンの出現状況は図1に示す通りである。

図中の横棒グラフ内の数字はそれぞれのパターンに該当する体験談の数である。母語場面では、「1a 連鎖型(評価先導)」が48例、「1b 連鎖型(相づち先導)」が3例、「2a 非連鎖型(評価)」が6例、「2b 非連鎖型(相づち)」が0例、そして「3 ゼロ型」が1例であった。それに対して、接触場面では、「1a 連鎖型(評価先導)」が25例、「1b 連鎖型(相づち先導)」が5例、「2a 非連鎖型(評価)」が10例、「2b 非連鎖型(相づち)」が12例、そして「3 ゼロ型」が11例であった。

以上から、母語場面の終結部では、連鎖型がほぼ9割を占め、評価や相づちで先導される発話連鎖で体験談が終結するのが基本的な終結部の組織化のパターンであることが分かる。他方、接触場面では、パターンが分散していて基本的な終結部の組織化のパターンはない。母語場面の基本パターンである連鎖型は半分未満であり、ゼロ型は2割を占めている。

さらに母語場面で評価を含む発話が終結部に現

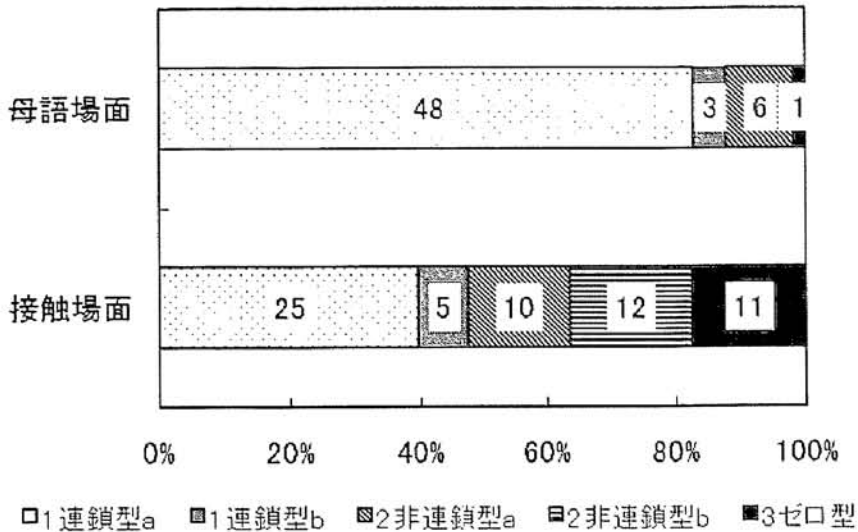


図1 終結部の連鎖のパターンの出現状況

れるものは、「1a 連鎖型(評価先導)」が48例、「2a 非連鎖型(評価)」が6例で、合計すると全体の93%を占めるのに対して、接触場面では55.5%となっている。一方、母語場面で終結部が相づちで開始されるか相づちのみのものは、「1b 連鎖型(相づち先導)」が3例、「2b 非連鎖型(相づち)」が0例で、全体の5%である。それに対して接触場面では27%を占めている。つまり、母語場面の終結部では評価表現が多用されるのに対して、接触場面では母語場面と比較して評価表現の割合が少なく、相づちの占める割合が大きい。この結果は、分析の対象は異なるが、一二三(2002)と類似の傾向を示すものである。

一二三(2002)では接触場面を共生言語が生成される場と捉え、母語場面との比較を行っている。その結果、日本語母語話者同士の会話では、日本語母語話者は積極的に意見や評価を表明し合うのに対して、接触場面では、日本語母語話者は意味交渉で応じる場合が多く、一方、非母語話者は、相づちか無反応で応じる場合が多いと述べている。そして、相づちを非母語話者が積極的に使うのは、会話を中断させない方略であるとしている。

次の会話例6は、接触場面の「1a 連鎖型(評価先導)」の例である。伊藤が周に高校時代に蛇を踏んでしまった話をしているが、「すごくびっくりした」(23)という伊藤の発言に対して周からは「そうか」(24)というあいづちの応答が見られたのみである。この例のように、接触場面の連鎖型は、母語場

面のような長い連鎖が続くのではなく、短い連鎖が多い。

会話例6 「1a 連鎖型(評価先導)」

蛇を踏んだ話(伊藤→周：接触場面)

- 1 伊藤 うん。なんか高校の時に
- 2 周 うん
- 3 伊藤 私は自転車で：高校に通っていた
- 4 周 あ：：
- 5 伊藤 で：その時に：夏↑
- 6 周 あ：
- 7 伊藤 だったんだけど、蛇が急に道を横切って
- 8 周 あ：：
- 9 伊藤 私はそれを自転車で踏みました。hhh
- 10 周 hhh そうか
- 2人で hhh
- 11 伊藤 後ろこう振り返ると：
- 12 周 うん
- 13 伊藤 蛇が：
- 14 周 うん
- 15 伊藤 真二つ hhh われてた
- 16 周 何↑
- 17 伊藤 蛇の尻尾がこう：きれてた
- 18 周 あ：：[へ
- 19 伊藤 [で心の中でごめんって言って
hhh
- 20 周 hhh
- 21 伊藤 学校にそのまま hhh
- 22 周 hhh

- 23 伊藤 すごくびっくりした。hhh
- 24 周 そうか hhh

6. 考察及び今後の課題

接触場面の様相の一端を明らかにするために、日本語母語場面と接触場面の体験談の終結部の組織化について比較分析した。その結果、まず、課題1については、以下のことが明らかになった。終結部の組織化のパターンは、連鎖型、非連鎖型、ゼロ型の3つのパターンに類別された。さらに連鎖型は、評価発話先導と相づち先導に、非連鎖型は、評価のみと相づちのみにそれぞれ下位分類された。

次に、課題2については、それぞれのパターンの出現率から、母語場面では評価を伴う発話連鎖によって終結部が組織化されていることが示された。つまり、話し手と聞き手は評価を積極的に言語化し、終結部の発話連鎖が長くなることで、体験談の終結の予測が容易になるとともに、山口(2008)の言う世界観の共有や共感の構築が導かれる。それに対して、接触場面では終結部の組織化の一定のパターンはない。そして、非連鎖型とゼロ型が5割を超え、共感構築よりも会話を進めることを重視する傾向が見られた。

以上のように、母語場面と接触場面では体験談の会話の参加の様相が異なることが明らかになった。以下では、そのような違いが生じた原因について、まず、終結部の言語活動としての難易度の観点から、次に母語話者と学習者、それぞれの言語及び文化の観点から、そして最後に共生言語形成の観点から考察を試みる。

6.1 言語活動としての難易度の観点から

ここでは、言語活動としての難易度の観点から母語場面と接触場面の終結部の様相の違いについて考えてみたい。会話例7はフィールドトリップに行った時のことをみほがまきに話している母語場面の終結部である。ここで「楽しかった」(7)と言えるのは体験者であるみほだけであり、聞き手であるまきは「楽しそう」(6)と言わなければならない。つまり、終結部の評価表現に多用される感情形容詞使用の際の人称制限が、接触場面では母語場面と比較して評価表現があまり用いられず、相づちが多用される一因となっているのではないかと推察される。さらに、終結部の連鎖は会話の流れに即して表情、思考などを瞬時に表出しなければならない時間的な制約のある発話連鎖である点で、日本語の使用に制約のある学習者にとっては難易度の高い言語活動であると言える。

会話例7 「1a 連鎖型(評価先導)」	
フィールドトリップの話(みほ→まき：母語場面)	
1 まき	へえ、いいな：[(.)いいな、いいな
2 みほ	[ありがとうございます ま：すって
3 みほ	日本人3人にはおごってくれた
4 まき	あ、そうなんだ
5 みほ	うん
→6 まき	いいな、楽しそう
→7 みほ	楽しかった

6.2 言語及び文化の観点から

体験談の終結部の様相が母語場面と接触場面と異なるのは、学習者の日本語力の問題以外にも、それぞれの母語の持つ特性や文化背景の違いが影響していることが考えられる。池上(2000)によれば、日本語は、ある事態を表現するときに話者が自らをその事態の中に置くというスタンスで把握する「主観的把握」をするが、一方、中国語は、事態を客観的に把握する傾向がある。つまり中国語では日本語母語場面に多く見られる「へー」や「ひどい」などといった瞬時の感情を表す習慣がない(徐 2007)ことも影響していることが推察される。次の会話例6は愛がビデオショップで母親が子供に自分の好みのビデオを押し付けていた様子を話しているものである。ふみの「へ：：」(4)という驚きを表す相づちで終結部が始まるのだが、この発話もまた次のふみの発話である「ひどい」(6)も中国語では通常表現されない。

会話例6 「1b 連鎖型(相づち先導)」	
ビデオショップでの話 (愛→ふみ：母語場面)	
1 愛	っていうかさ：普通子供優先じゃん
2 ふみ	そうだよね hh[hhh [なのに全部 だめ、
3 愛	クレオン新ちゃんはもういい
→4 ふみ	へ：：
5 愛	[お母さん本当に飽きたからって
→6 ふみ	ひどい、hhhh
7 愛	またこれずっと # #
8 ふみ	愛していない子供 hhh

評価や感情表現について、野村(2003)は「一定の社会に帰属する人のあいだで共有される様相が高い」(p.40)と述べている。たとえば先に挙げた会話例5では鈴木は王の夏休みの体験談にあいづちと聞

き返しのみで応じている。他にも学習者が語った、正月に麻雀や花火をして楽しかった話にも母語話者からは内容に関する質問のみで、評価発話や驚きや共感を表す相づちなどは見られなかった。さらに先に挙げた会話例6の蛇を踏んだ話の周の「そうか」(24)という反応は筆者には物足りないように思われるが、12名の中国語母語話者にインタビューしたところ、これは中国語母語話者にとってはあまり違和感のない反応であり、「へー」「こわーい」などと反応するよりも、むしろその蛇についてもっと詳しく知りたい気持ちになったのではという回答であった。つまり、帰属する社会によって体験談にどのような評価をするかは異なる可能性があるということである。すなわち、接触場面と母語場面の相違は、日本語と中国語の事態把握の相違とともに、Ochs他(1992)やMinami(2002)らによって明らかにされたように、私たちは、何を体験談で語るのか、あるいはどのように体験談を語り開くのか、さらにはその体験談に含まれる価値観などについて、それぞれの文化の中で学びながら育つことにも起因することが考えられる。

6.3 共生言語形成の観点から

接触場面の体験談は母語話者によるものが32、学習者によるものが31とほぼ同数であった。このことから接触場面の特性は必ずしも学習者によってのみもたらされたものではないと言えよう。岡崎(2003)では、言語共生化の過程では、コミュニケーション自体を成立させるために双方の使用者から相互に歩み寄る様々な言語的共生行動の形の協働の過程が形成されることが指摘されている。代表的なものとしては、相互調整行動・配慮行動・円滑化行動がある。それらのうち、日本人同士では例外的にしか行われないコミュニティにおける共生を容易にするような新たな会話の進め方が、配慮行動として創設されていると述べている。本研究の対象である母語話者も、言語的共生化の過程で配慮行動の一つとして母語場面とは異なる言語行動を取っている可能性が示唆される。

6.4 今後の課題

接触場面では、母語話者の言語行動が母語場面とは異なることや、接触場面特有の言語表現が用いられること、あるいは、コミュニケーションの遂行のためのコミュニケーションストラテジーが使用されることなどが様々な研究によって、明らかにされ

ている。本研究では接触場面の会話に見られる体験談の終結部の組織化という観点から分析を行った結果、発話の組織化の様相からも両場面が異なる意味づけを持つことが示唆された。

しかし、本研究は、中国で学ぶ中国語母語話者上級日本語学習者と日本語母語話者との限られたデータであり、本研究の結果から接触場面を一般化することはできない。今後は、その他の言語活動、年齢や性別、母語の異なるデータを収集し、接触場面についてのさらなる実証的検討を重ねたい。

参考文献

- 池上嘉彦(2000)『「日本語論」への招待』講談社。
- 岩崎勝一・大野剛(2007)「『即時文』・『非即時文』—言語学的方法論と既成概念—」中田秀也・定延利之・伝康晴(編)『時間の中の文と発話』ひつじ書房, 135-157。
- 岡崎敏雄(2003)「共生言語の形成—接触場面固有の言語形成—」宮崎里司/ヘレン・マリオット(編)『接触場面と日本語教育—ニューストブニーのインパクト』明治書院, 23-44。
- 中田秀也(2006)『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共一成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社。
- 佐々木泰子(2006)「物語の相互行為的分析」『社会言語科学会第18回大会発表 論文集』, 52-55。
- 定延利之(2008)『類語の文法—体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話』ちくま新書。
- 徐一平(2006)「「熱烈歓迎」の意味論—日本語と中国語における感情移入について」『言語』5, 52-57。
- 中田智子(1992)「会話の方策としてのくり返し」『国立国語研究所研究報告集』13, 267-302。
- 西川玲子(2005)「日常会話に起こるナラティブの協働形成—理論構築活動としてのナラティブ—」『社会言語科学』7(2), 25-38。
- 西口光一(2008)「市民による日本語習得支援を考える」『日本語教育』138号, 24-32。
- 野村眞木夫(2003)「現代語のテキストにおける感情表現」『日本語学』22(1), 36-44。
- ・三朋子(2002)『接触場面における共生的学習の可能性』風間書房
- ファン、S.K.(2006)「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」『日本語教育の新たな文脈』独立法人国立国語研究所編 アルク出版, 120-141。
- 山口治彦(2008)「汗と涙のシンデレラ—サクセス・ストーリーの語り方」『言語』37(1), 大修館書店, 66-71。
- Chafe, W. ed. (1980) *The Pear Stories: Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative Production*. Norwood, New Jersey: Ablex.
- Goodwin, C. & Goodwin, M. H. (1992) Assessments and the construction of context. In A. Duranti & C. Goodwin (eds.),

- Rethinking Context: Language as an Interpretive Phenomenon*. 147-190. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hymes, D. (1996) *Ethnography, Linguistics, Narrative Inequality: Toward an Understanding of Voice*. London: Taylor & Francis
- Labov, W. (1972) *Language in the inner city*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Minami, M. (2002) *Culture-specific Language Styles The Development of Oral Narrative and Literacy*. Multilingual Matters Ltd.
- Ochs, E., Taylor, C., Rudolph, D., and Smith, R. (1992) Storytelling as a Theory-building Activity. *Discourse Processes*, 15(1), 37-72.
- Sacks, H. (1974) An analysis of the course of a joke's telling in conversation. In Richard Bauman, and Joel Sherzer, (eds.), *Explorations in the ethnography of speaking*, 8., 337-353. Cambridge: Cambridge University Press.
- Strauss, S. & Kawanishi, Y. (1996) Assessment Strategies in Japanese, Korean, and American English. In Akatsuka, N. (ed.), *Japanese / Korean Linguistics 5* 149-166.
- Tannen, D. (1989) *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Trim, J., North, B. & Coste, D. (2004) 『外国語教育 <2> 外国語の学習,教授,評価のためのヨーロッパ共通参照枠』吉島茂・大橋理枝(訳・編)東京:朝日出版社.

ささき やすこ／お茶の水女子大学 人間文化創成科学研究科
sasaki.yasuko@ocha.ac.jp

On the Characteristics of Narrative Codas in Contact and Internal Situations

SASAKI Yasuko

Abstract

In this paper I analyze the characteristics of the contact situation by comparing narrative codas created in the contact situation with those created in the internal situation.

The results show that there are three classifications of coda. The first is the "chain pattern," which begins with an assessment or an evaluative *aizuchi* followed by several sequences of utterance; the second is the "non chain pattern," which has an assessment or an evaluative *aizuchi* followed by no sequence of utterance; the third is the "null pattern," which has no coda.

The coda of internal situations tends to become long and contains several assessment and evaluative *aizuchi* sequences. Thus, the interlocutors in the internal situation can recognize the atmosphere and systematically bring the conversation to a noticeable apex or climax.

On the contrary, the coda of contact situations tends to become short or even leads to no sequences of utterance. Hence, I conclude that the interaction in contact situations is more focused on content than on empathy-building.

【Keywords】 contact situation, internal situation, narrative, coda, assessment, sequences of conversation

(Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University)